

接触場面における日本語学習者の調整行動に対する母語話者の反応

—初対面会話の観察から—

渡辺 民江

Native Speaker's Reaction towards Learner's Communication Strategies:

The Observation of the First Encounter

Tamie WATANABE

Two first-meeting conversations between Japanese native speakers and Chinese Japanese learners were analyzed to investigate if Request for Clarification strategies by Japanese learners is effective. The author picked five cases from the data when Japanese learners used those strategies ineffectively. The interview sessions with Japanese native speakers were held a few days after the conversations, to find out what they thought was happening in each of those cases. These interviews revealed that the Japanese native speakers do not always conclude that Japanese inadequacy of the learner is the problem. Rather, they thought their ability of explaining things, or choosing topics are inadequate. The author found only one example of successfully used Request for Clarification strategies by Japanese learner from these conversations. From this, we can say that it is important to organize orientation session for Japanese native speakers to guide through the typical Request for Clarification strategies by Japanese learners, when you run the program introducing conversation partners to Japanese learners. Having this kind of orientation would contribute to the smooth conversation between Japanese native speakers and Japanese learners, and also avoid unnecessary misunderstandings between them.

Keywords: contact situation, first encounters, request for clarification, conversational analysis, native speaker's reaction

1. はじめに

日本語教育を効果的に進めるには、教室内学習と教室外での接触場面の両アプローチが不可欠である。そのため、教師は教室内での授業を充実させるのみならず、いかに教室外での接触場面を提供するかを模索し実践してきている。例えば、授業にゲストを呼び学習者と会話させるビジターセッションを行う、ホームステイの機会を作る、異文化体験のワークショップを行う等、様々なものが考えられる。その1つに本学で20余年にわたって行なわれているカンバセーション・パートナー・プログラム（以下カンバセ）がある。カンバセは、留学生と日本人学生がグループを作り、学期を通し

て週に1回以上日本語で会話するプログラムである。宮副他(2003)は、その効果を検証し「HJ¹は教室内で習ったことを教室外場面で実際に使い、相手にわかってもらえたことで自信をつけている。その自信が、次の日本語使用への意欲に結びつき、全般的な日本語運用能力の向上をもたらしている」と評価している。また、帰国後の元留学生に対する調査から、カンバセは高度なインターアクションの場であったという評価も得られた(渡辺他, 2004)。

このように、カンバセは留学生(以下日本語学習者)と日本人学生(以下母語話者)の継続的な接触場面であると言える。しかしながら、母語話者から「会話が続かない」「話題が途切れる」「うまくコミュニケーションがとれない」といった課題も出されている²。これは、性格的に合う、合わないという個人的なものも大いに影響すると考えられるが、母語話者と非母語話者の接触場面であるがゆえの理由も存在するにちがいない。その理由を明らかにし、回避方法を提示することができれば、接触場面のコミュニケーションを円滑に進めるための一助となるであろう。

そこで、本稿では、日本語学習者と母語話者の初対面会話を観察し、母語話者は非母語話者の調整行動を認識できているか否か、また、それをどう受け止め反応しているかを分析した。

2. 先行研究

ネウストプニー(1995)は、「日本語教育の目的が、日本語を外国人の話し手に使わせることにあるなら、外国人の話し手が実際に日本語をどのように使っているかを研究してみる価値があるはずである。むしろ、これは日本語教育の出発点であり、かつ到達点であるかもしれない」としている。つまり、日本語教育は、日本語学習者のより高いコミュニケーション能力を育てることを目的としていると言える。円滑なコミュニケーションを進めるためには、様々なコミュニケーション・ストラテジー(以下CS)があり、それらの解明を試みる様々な研究成果が出されている。中でもコミュニケーションに問題が起きた際、それを解決するために用いるCSである調整行動に着目した研究も多く行われている。林(2008)は、調整行動の1つである聞き返しの成功率を分析し、フォローアップインタビューから、成功率が表現形式によって決定されない理由は、聞き返しに対して日本語母語話者がどのように留意し調整するのか、また、日本語非母語話者が推論を働かせることによって自己解決する場合があることなどが関わっていると考えられるとしている。そのため、調査対象者を増やし、更なる分析が必要であると述べている。片山・菅(2010)は、初級学習者の接触場面を「人的リソース」「物的リソース」「社会的リソース」の3つに分類した研究を行っている。「学習者と人的リソースの関わり方」を分析した結果、学習者が日本語接触をうまく

¹ 香港理工大学短期留学生の略語である。

² 日本人学生は、カンバセ運営者に留学生に会う度メールで簡単な報告を提出している。

活性化できないのには、学習者に合ったリソースが見つからないという外的要因と、働きかけができないという学習者自身の内的要因があることを明らかにしている。また、施 (2013) は、日本語母語話者と台湾人日本語学習者による接触場面での自然会話を分析し、「形式調整行動」「内容調整行動」の両面から調整行動がインターアクションの中でどのように機能しているかを考察している。その結果、接触場面においてより円滑なコミュニケーションを行うためには、日本語母語話者と日本語学習者がどのくらい共通理解を求め、互いに協力するかに焦点をあてなければならないとしている。更に、従来の接触場面研究では、分析の視点が形式面の意味交渉に偏り、内容面の意味交渉の視点が欠けていると指摘している。

3. 本研究の意義

本研究では、来日直後の中級日本語学習者の中国人留学生とカンバセのパートナーになる日本人学生との初対面会話を録画、録音し、調整行動がどのように行われているかを観察した。さらに、調整行動が行われたにもかかわらず、うまく機能しなかった場面を取りあげ、日本人学生にフォローアップインタビューを行うことによって、その場면을日本人学生がどう受け止め、どのような認識を持っていたのかを分析した。

本研究の対象であるカンバセは、片山・菅 (2010) の示した継続的な「人的リソース」の接触場面であり、分析対象としてふさわしい。また、分析にあたっては、施 (2010) の指摘どおり「形式調整行動」および「内容調整行動」の両面から調整行動を取り上げることとする。それにより、林 (2008) が述べている成功率が表現形式によって決定されない理由に何らかの示唆が見出せる可能性がある。

さらに、分析結果から接触場面における母語話者側の反応の要因を探ることができる。これは、前出のカンバセを進める上での課題に対する具体的な解決策を示すことに繋がるであろう。

4. 調査の方法

中級日本語学習者と日本語母語話者 1 対 1 の初対面会話を記録した。カンバセのパートナーとなる予定のペア 2 組 (以下 A, B) から協力が得られた。会話の記録方法は録画、録音、文字化である。数日後に録画データを見ながら母語話者にフォローアップインタビューを行った。以下に詳細をまとめる。

- 調査時期：平成 30 年 4 月。
- 調査協力者 (日本語学習者)：来日約 2 週間後の中国人短期留学生 2 名 (以下, NNSA, NNSB)。女性。日本語能力試験 N2 取得者。
- 調査協力者 (母語話者)：NNSA, NNSB 各々のカンバセのパートナーとなる日本人大学生 2 名 (以下, NSA, NSB)。女性。外国人との日本語での会話経験はほぼない。
- 初対面会話の時間：約 30 分。

- 母語話者フォローアップインタビューの時期および時間：初対面会話から数日後の約1時間。
- 記録：ビデオによる録画およびボイスレコーダーによる録音。会話の文字化データ。

5. 調査結果

5.1 分析の枠組み

2組の約30分間の初対面会話を観察したところ、母語話者も日本語学習者も互いに様々なCSを駆使しながら会話を進めている様子が観察された。本研究では、調整行動がうまく機能しなかった（不理解のままであったり、話題転換が起こったりした）例を取り上げ、日本語学習者の調整行動を母語話者がどのように受け止め、反応しているかを分析した。なお、分析にあたっては、施（2013）に従い調整行動を形式面と内容面の両面から観察した。形式面は、「形式調整行動」の「調整要請型（聞き返し、支援要請、確認要求、理解チェック）」と「調整実行型（理解促進、支援実行、他者修正）」である。また、内容面は、「内容調整行動」の「調整要請型（内容確認要求、明確化要求）」と「調整実行型（内容確認要求、明確化）」である。

なお、実際の初対面会話データは原文どおりであり、フォローアップインタビューの直接引用には、わかり易くするため筆者が最低限の加筆を行った。

5.2 調整行動がうまく機能しなかった会話データ例³

5.2.1 例1 (A) NSAがNNSAの調整行動に気づかず、不理解のまま話題転換が行われた場面

- | | | |
|----|-------|---|
| 1 | NSA: | へえー、ちがうなー。 |
| 2 | NNSA: | うん、何歳でお酒を飲んでいいです。 |
| 3 | NSA: | へえーすごいな。ななさい？ |
| 4 | NNSA: | いーやー、～でもいい。(すごい) |
| 5 | NSA: | でも、なんか、あれか漢方とか。漢方じゃないけど。なんかお酒のなんか健康にーいいやつみたいなのんとか、中国とかだといっぱい。 |
| 6 | NNSA: | あー。 |
| 7 | 二人: | ～～ふふふふふ。 |
| 8 | NSA: | あ、ごめん、なんでもないです。～ |
| 9 | NNSA: | ～ |
| 10 | NNSA: | (・・) どの学部ですか。 |

NNSAが「何歳でお酒を飲んででもいいです」と言うべきところを「何歳でお酒を飲ん

³ 文字化データの記号は文末にまとめて記す。

でいいです」(2行目)と言い間違えている。NSAが「何歳」を「ななさい」と聞き取り、「へえーすごいな、ななさい？」(3行目)と「内容調整行動」の「内容要請型(明確化要求)」をした。NNSAは否定した後、「でもいい」(4行目)と「形式調整行動」の「調整実行型(理解促進)」を行っている。しかし、NSAはこの調整行動を受け止めず、不理解のまま漢方の説明に進んでしまう。その後、2人とも互いの不理解の原因を認識せず、笑った後、この話題を止めてしまった。

この場面の録画データをNSAに見せたところ、即座に「あー、何歳って言ってる」と述べた。つまり、NNSAの「飲んででも」という部分の文法的な誤りに気づかず、「ななさい」と理解することで、「ななさいでお酒を飲んでいいです」という文として解釈したと考えられる。また、不理解のまま話題を止めてしまったことについては、NSAは漢方についての自らの説明が下手でこれ以上うまく説明できないと感じたからだと述べた。

これは、母語話者は日本語学習者の日本語の誤りを捉えられない場合、日本語学習者の調整行動に気づかないことがある。また、会話が続かない原因は、日本語学習者の日本語力の問題ではなく、自らの説明力不足にあると判断する場合があることを示している。

5.2.2 例2 (A) NSAが不理解を自己解決し、NNSAの調整行動に対応しなかった場面

- 1 NSA: えっとでっかい池のあるあたり、をテリトリーに生活しています。
何学部ですか？
- 2 NNSA: 人文学部。
- 3 NSA: あー人文。何学科？
- 4 NNSA: えっ、がっか？
- 5 NSA: がっか。
- 6 NNSA: がっかは(・・)。
- 7 NSA: あれ、人文は人文の学(・・)あれ、人文学部？
- 8 NNSA: へい、えー、くわしいのわからない。
- 9 NSA: あー最近。
- 10 NNSA: え。
- 11 NSA: 最近来たの？

NSAがNNSAに人文学部の何学科に所属しているのか聞いている場面である。NNSAは「がっか？」(4行目)と「形式調整行動」の「調整要請型(聞き返し)」を行っており、NSAはそれに反応し「形式調整行動」の「調整実行型(理解促進)」で「がっか」(5行目)と繰り返している。それでも理解できないNNSAは、再度「がっかは」(6行目)と「形式調整行動」の「調整要請型(聞き返し)」をしている。しかし、NSAはそれを受け止めず「あれ、人文は人文の学(・・)あれ、人文学部？」(7行目)と反応したため、NNSAは「くわしいのわからない」(8行目)と不理解を明確化している。

しかし、NSAはその不理解に対応せず、「最近来たの？」(11行目)と話題を変えてしまう。NSAになぜ説明をやめてしまったのかを聞いたところ、NNSAが「学科」がわからずに調整行動をしているとは受け止めておらず、NSAにとって他学部の人文学部は、もともと学科はなかったのかもしれないと考えていたことがわかった。つまり、NSAは、NNSAの不理解の理由は自らの発話内容の不適切さにあると判断し、自己解決していたことがわかった。

これは、日本語学習者の調整行動は、母語話者が他の理由により自己解決することで放置され、「調整実行型」に結びつかないことがあることを示している。

5.2.3 例3 (A) NSAが会話の内容、話題を不適切だと判断し、NNSAが不理解のまま話題転換が行われた場面

- 1 NSA: 中国だと1人っ子政策？
2 NNSA: はい。私、1人。
3 NSA: あ1人っ子、なんだー。
4 NNSA: さびしー。ふふ。
5 NSA: ぶっちゃけーあれだよね。ぶっちゃけ申請してないだけで、
6 NNSA: えー？どんな意味？
7 NSA: こう、ぶっちゃ、こう、(・・・) 実は、実は、こう、政府の人に言
ってないだけで、(うん) 子供何人かいるみたいな、(へー) ことな
んだけど、
8 NNSA: (・・・) わからない。～
9 NSA: (・・・) 1人、なんだなんだろう。(・・・) あーガバメント、ガバ
メントに(ん?) ～もうやめうか。もうやめよこの話題。
10 二人: ～～～
11 NNSA: すみません。～

1人っ子政策という抽象的な話題になり、NNSAが「えー？どんな意味？」(6行目)と明確に「形式調整行動」の「調整要請型(聞き返し)」を行った。NSAもそれに応えて「調整実行型(理解促進)」を行っている。しかし、それに対し再度NNSAが「わからない」(8行目)と同じ調整行動をとっているにもかかわらず、NSAは理解促進を途中でやめてしまい「もうやめよこの話題」(9行目)と打ち切っている。その理由は、NNSAが繰り返し調整要請をしたため、NSAが困惑したか、説明に窮し諦めてしまったのではないかと推察される。しかし、NSAに聞いたところ全く違う理由であった。NSAは話題を打ち切った理由を、政府に申請せずに子供を育てている例もあると聞いたことがあり、確認してみたいと考えて話していたが、途中で、嫌味に聞こえるまづい話題で踏み込み過ぎたと感じたからだと述べた。つまり、NSAはNNSAに言葉の意味が伝わっていないと認識するのではなく、話題の不適切さに注目したのである。

これは、母語話者は日本語学習者の「形式調整行動」に対応することより、話題や

内容の適切さを考慮し、会話を進めたり終わらせたりしていることを示している。これは、母語話者にとっての会話の目的が、初対面の相手との人間関係構築にあるからであろう。

5.2.4 例4 (A) NSA が会話の順調さを優先し、NNSA の調整行動にうまく対応しなかった場面

- 1 NSA: あれかな、普通に K-pop のアイドルみたいな (うー) 人が好き？
2 NNSA: うん。
3 NSA: あーそうか。じゃ、韓国の (～) 大学に行ったほうがよかったかな。
4 二人: ～～
5 NSA: じゃ韓国人留学生を狙う、みたいな。
6 NNSA: [首をかしげる]
7 NSA: 韓国人の (うん) 留学生を一。
8 NNSA: ああ、韓国人の (狙う,) 留学生は (うん) ただ三人。
9 NSA: 三人？
10 NNSA: 女の子。
11 二人: ～～

会話開始から 20 分ほど経過し、好きな男の子の話題になっている場面である。NSA が「韓国人留学生を狙う、みたいな。」(5 行目) と発話し、NNSA が「形式調整行動」の「調整要請型 (聞き返し)」(6 行目) を行っている。この会話に至るまでに「韓国人」「留学生」という語彙は何度も表出しているため、ここでは NNSA が「狙う」を理解できないための調整行動であると推察される。しかし、NSA はこれに対応する「形式調整行動」の「調整実行型 (理解促進)」を行わず、「韓国人の (うん) 留学生を、」(7 行目) と繰り返した。そのため、NNSA は不理解のまま「韓国人の留学生はただ三人」(8 行目) と会話を進めている。NSA は対応しなかった理由について、「この時は会話が楽しく盛り上がっていたので、NNSA が『狙う』という言葉の意味を知らなかった可能性を気にしていなかった」と述べている。

これは、会話が順調に進み楽しい場面では、母語話者は日本語学習者の調整行動を受け止められず、会話の進展を優先させることを示している。

5.2.5 例5 (B) NNSB が不理解を放置したまま適切な調整行動をとらなかったことにより NSB に思わぬ感情を抱かせた場面

- 1 NSB: なんかに聞いてばかりで、申し訳ないんだけど、なんで日本に来たんですか。
2 NNSB: なんで (・・) おー、私の専門は日本語ですから。
3 NSB: あーそっか。そりゃそうですよね。日本語勉強してんだったら、

- 日本にこなきゃって感じですよ。 (あー) めっちゃ上手ですね、日本語、やっぱり。～
- 4 NNSB: ～上手ではない。ちょっと、私の聴解はちょっと難しい。聴解。
5 NSB: ちょうかい？
6 NNSB: 聴解。聴解わかる？
7 NSB: わからない。
8 NNSB: [聴解という文字を実際に紙に書く] これ聴解。
9 NSB: ってのは、どういう？グループの名前みたいなものですか。ちょうかいとはなんですか。
10 NNSB: 他の人と一緒におしゃべりの時、他の人は誰を言いますか。ちょっと、ちょっと他の人が何を話すをちょっと理解できない。
11 NSB: あー、話を聞くのが (時々) 自分で理解することができないことが (うん) あるんですか。
12 NNSB: ですから、他の人と日本語で話す時は、ちょっと緊張。
13 NSB: あーわかる。それは、私もなんかその全然喋れないんですけど、英語ちょっとなんかその英語だけで授業するっていう (あー) 授業があって、それ聞いてるときに、なんか全然わかんないと、なんかちょっとどうしてもやだなーっていうのがあって。
14 NNSB: (・・) ○○ちゃんの専門はちょっと忘れて。

聴解の意味がわからない NSB の「形式調整行動」の「調整要請型 (聞き返し)」に対して、NNSB が「調整実行型 (理解促進)」を図り会話がうまく進んでいる場面である。しかし、NSB が英語の授業の経験を長く話したところで、突然、NNSB が短い間の後「○○ちゃんの専門はちょっと忘れて」(14 行目) と話題転換している。この一連の会話について NSB がどう受け止めていたかを聞いたところ、NNSB はきっと初対面の人にいると聞かれるのは嫌だろうと慮り、遠慮しながら会話を進めていたことがわかった。また、NSB が英語の授業の話をした後、NNSB によって突然話題転換された場面についてどう受け止めたかを聞いたところ、NSB は NNSB に話が伝わらなかったのか、または自分には興味がないのかと感じたと述べている。NSB の長い発話に対し、NNSB は理解できない部分があったと推察されるが、明確な調整行動をとっていない。恐らく、うまく調整行動がとれず、不理解のまま、話題転換することによって次の会話に続けようとしたのであろう。

これは、日本語学習者がうまく調整行動をとらないと、人間関係構築において母語話者が思わぬ推察や感情を抱く可能性があることを示している。

5.2.6 例6 (B) NSB が NNSB にとっての有用性を判断基準とし、他者修正を行った場面

- 1 NNSB: 私は、音楽を聴く。

- 2 NSB: あー。
3 NNSB: 寝る前に音楽を聴く。好き。そして、ウィンドウ。最近ウィンドウをする。ジョギング。
4 NSB: 日本だと、運動、運動っていうか。今、ウィって聞こえたから、
5 NNSB: ああ。
6 NSB: 運動の方がー。
7 NNSB: 運動？ああ、うん。
8 NSB: 運動か。ジョギング？
9 NNSB: うん。

NNSB が運動という語彙に自信がなく「ウィンドウ。最近ウィンドウをする。ジョギング」(3 行目)と「形式調整行動」の「調整要請型(支援要請)」を行っている。それに対応し NSB は、「日本だと、運動、運動っていうか。いま、ウィって聞こえたから、」(4 行目)と「形式調整型」の「調整実行型(他者修正)」を行っている。調整行動がうまく機能している場面だが、今回の 2 組の会話データ唯一の他者修正であったため、例外的にコメントを求めた。NSB は、明確な修正を行った理由を「話題が趣味の話だったので、これからも NNSB はよく聞かれるだろうし伝わらないといけなかったので直した」と述べた。

これは、母語話者による「調整実行型(他者修正)」は行われにくく、また、行われる際には、日本語学習者にとっての有用性が動機付けになることを示している。

6. 考察

以上のとおり、A と B の 2 組の会話において、調整行動がうまく機能しなかった例を 5 つ取り上げた。

例 1 では、NNSA の「形式調整行動」の「調整実行型(理解促進)」が見過ごされている。NSA は NNSA の文法的誤りを自己解決し、違った文を成立させて意味理解をしている。また、NSA は NNSA の不理解を日本語力の問題とは捉えず、自らの説明力不足に起因していると認識している。

例 2 では、NNSA が「形式調整行動」の「調整要請型(聞き返し)」を行っているにもかかわらず、NSA は自らの発話内容が的外れであったと自己解決し、調整行動をとっていない。NSA は NNSA の日本語力が不理解の要因であるとは捉えず、自らの発話内容に問題があったと判断している。

例 3 でも、NNSA が「形式調整行動」の「調整要請型(聞き返し)」を行っているにもかかわらず、NSA は話題が不適切であると判断し、調整行動をとらずに話題を打ち切っている。NSA は NNSA の調整要請に応えるより、不適切だと判断した話題の終了を優先させている。例 2 同様、NSA が話題内容によって判断したものである。

例 4 でも、NNSA が「形式調整行動」の「調整要請型(聞き返し)」を行っているにもかかわらず、NSA の意識は会話の楽しさに向き、調整行動を見過ごしている。

例5では、NSBの長い会話に対し、NNSBがうまく調整行動をとれず突然話題転換をしている。NSBは、その原因をNNSBの日本語力の問題による不理解であると推察する一方、人間関係に関わる要因にも言及している。ここでは、「自分に興味がないのかもしれない」と述べている。

加えて、例6の調整行動がうまく機能している場面においても、NSBが修正を実行するか否かの判断基準が、NNSBの立場に立ったNNSBにとっての有用性の配慮にあることがわかった。

以上のことから、初対面会話において、母語話者は調整行動がうまく機能しない理由が、日本語学習者の日本語力の問題や日本語の誤りに起因すると認識しないことがあることが示された。むしろ、母語話者は自らの説明力不足や話題の不適切さが原因だと認識している。また、会話が順調で楽しいと感じる場面では、調整行動は見過ごされる可能性がある。さらに、日本語学習者が適切な調整行動をとれない場合には、母語話者に思わぬ感情を抱かせる可能性があることも示された。

7. まとめと今後の課題

2組の初対面会話において調整行動がうまく機能しなかった場面を分析し、母語話者は日本語学習者の日本語力よりも自らの説明力、話題の適切さ、会話の順調さ等に視点を向けて会話を進める傾向があることがわかった。つまり、母語話者は、会話の不理解が生じた要因を日本語学習者の問題だと捉えていない。これは、林(2008)が述べている成功率が表現形式によって決定されない理由の1つの要因を示すことに繋がると言えよう。また、母語話者が日本語学習者の誤りを修正する場面においても、話題と日本語学習者にとっての有用性が関わっていた。このように、母語話者は、常に内容面から日本語学習者に配慮しつつ会話を進めていることがわかった。母語話者は、たとえ会話の相手が日本語学習者であっても、会話の不理解の要因を日本語力だとは捉えにくく、自らに問題があると判断していることがわかる。また、日本語学習者にとっての有用性が認識された場面でのみ、日本語学習者の日本語の誤りを修正している。このことから、日本語母語話者が日本語学習者に配慮し、日本語学習者中心に会話を進めていることがわかった。

さらに、本結果をカンバセにフィードバックすることで、カンバセの課題に対する解決策を講じることができる。例えば、カンバセ初参加者に対し、今回の場面を再現した動画等を見せ、会話不理解の要因を考察するセッションを行うことや、オリエンテーション資料を作成すること等、具体的な事前指導が考えられる。このような事前指導ができれば、外国人との日本語での会話経験がほぼない母語話者が多いカンバセに、大きく寄与することとなる。

これまでも調整行動の実態を示し分析する研究は数多く行われてきた。しかし、本研究は、調整行動がうまく機能しなかった場面を取り上げ、母語話者の反応を示し分析したという点で特徴的であると言える。また、今回の結果は、カンバセの課題解

決に向けた事前指導等につなげることが可能である。それは、母語話者と日本語学習者の円滑なコミュニケーションに寄与するものとなり、非常に意義深いものであると言える。

しかしながら、今回の結果は一定の傾向を示すにとどまっていると言わざるをえない。今後はさらに分析データを増やすこと、日本語学習者の国籍や日本語力による違いに着目すること、日本語学習者のフォローアップインタビューも加えること等を課題にさらに研究を進めていく必要がある。

脚注3 文字化データの記号

文字化記号	意味
ー	語尾が伸びている。
～	笑い。
(・・・)	2秒以内の間。
?	語尾が上がっている。
()	発話に重なるように発せられている相手の発話。
[]	非言語行動。
○○	個人が特定される固有名詞。

参考文献

- 林里香 (2008) 「聞き返しのストラテジーと問題解決-日本語非母語話者による調整計画段階の機能と表現形式の選択」 千葉大学大学院人文社会科学部研究プロジェクト報告書第218集『多文化接触場面の言語行動と言語管理』 接触場面の言語管理研究 vol.7, pp.1-18.
- 片山智子・菅智穂 (2010) 「日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査」『ポリグロシア』 Vol.19, pp.79-89.
- 宮副ウォン裕子・上田美紀・渡辺民江 (2003) 「カンバセーション・パートナー・プログラムの参加者は何を学びあったか-中部大学生と香港理工大学の双方向的学習の調査と分析」『留学生教育』8号, pp.201-220.
- ネウストプニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 施信余 (2014) 「初対面接触場面における調整行動」『日本語／日本語教育研究 [5] 2014』 pp.191-206.
- 渡辺民江・上田美紀・宮副ウォン裕子 (2004) 「カンバセーション・パートナー活動の効果と問題点-留学生, 教員を対象とした活動評価の調査から-」『留学生教育』9号, pp.157-167.